

運動部活動における外部指導員の育成カリキュラムの開発

塩多雅矢*

森山進一郎**

抄録

近年では、部活動について、顧問の業務負担や過度な拘束などの問題点が取り上げられている。その問題を解決するために 2017 年にスポーツ庁により部活動指導員が制度化された。しかし、外部人材が関わることで部活動の過熱化に拍車をかける可能性もあり、顧問が「保護者の理解不足・過熱」を悩みにしていることもある。そこで本研究は、運動部活動における外部指導員の育成カリキュラムモデルを開発することを目的として、保護者への自由記述アンケート（調査①）、顧問へのインタビュー（調査②）、および調査①と②の結果を踏まえた高校野球部に対する指導を行った大学生へのインタビュー（調査③）を分析した。

調査①では、93名の保護者に対して「部活動を通じて子どもに期待する姿」と「部活動指導者に望む能力・資質」に対する自由記述アンケートを行い KH Coder を用いて分析した。その結果、保護者は、子どもには「協調性・社会性を身につける」や「技術・体力の向上」、指導者には「指導への情熱」、「専門技術」や「人間力」を求めていることが明らかとなった。調査②では、17名の中学・高校野球部の顧問教員に対して「部活動において子どもにどのような成長を望み、どのように接しているか」と「外部指導員にどのような能力や資質を望むか」について半構造化インタビューを実施し、KJ法を用いて分析した。その結果、顧問は子どもには「社会に必要とされる人材育成」、「個人能力の向上」、「体験の場の提供」を、外部指導員には「教育者としての協働」、「子どもの成長の手助け」と「指導能力」を求めていることが明らかとなった。調査③は、2校の高校野球部に対して、硬式野球部に所属する2名の大学生が外部指導員として野球部の指導に当たり、指導中および後に「指導で心がけたこと」についてインタビューを実施し、KJ法を用いて分析した。その結果、外部指導員の育成にあたっては、「専門知識」、「部員との信頼関係」および「コーチングの技術」を高めるようなカリキュラムとすることが有効だろう。

キーワード：部活動，保護者，顧問，外部指導員，質的研究，指導実践

* 東京学芸大学大学院教育支援協働実践開発専攻 〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

** 東京学芸大学 〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

Development of a training curriculum for outside instructors in sports club

Masaya Shiota *
Shinichiro Moriyama**

Abstract

In recent years, issues relating to sports club activities, such as the burden on advisors and excessive restraints, have been raised. In 2017, the Sports Agency appointed a club activity instructor to solve this problem. However, the involvement of outside human resources may sometimes cause conflict in clubs. And advisors are worried about the lack of understanding and conflict with parents. The purpose of this study was to examine the development of a curriculum for training club instructors by three surveys; (1) a free-form questionnaire for the parents of children enrolled at sport clubs, (2) interviews with advisors at the clubs, (3) extracting the results and issues highlighted by university students appointed as coaches at clubs

In survey (1), 93 parents were asked to fill in a descriptive questionnaire about the expectations their children had for the club, and the abilities and qualities they expected from club leaders. These results were analyzed using KH Coder. As a result, it was founded that the needs of parents were “cooperation and sociality” and “improve skills and physical strength” for children, and “passionate for guidance” , “special skills” and “authority” for club leaders. In survey (2), semi-structured interviews were conducted with 17 advisors to ascertain what kind of personal development they wanted, and how they interacted with the children in the clubs and what kind of abilities and qualities they want to acquire from outside instructors. The results were analyzed using the KJ method. As a result, it was founded that the needs of advisors were “human resource development” , “improvement in personal abilities” and “provision of experiences required by society” for children, and “collaboration with an advisor” , “helping children to grow” and “teaching skills” for outside instructors. In survey (3), two high school baseball clubs were coached by two university students belonging to the baseball club as outside instructors. During and after the training, we interviewed them on “what you tried to keep in mind.” The results were analyzed using the KJ method. As a result, in developing outside instructors, it would be effective to develop a curriculum that enhances "s specialized knowledge ", "trust with members" and "coaching skills".

Key Words: Sports club, Parents, Advisor, Outside instructors, Qualitative research, Teaching practice

* Tokyo Gakugei University Graduate School Education Support Collaborative Practice Development
4-1-1 Nukii Kitamachi, Koganei City, Tokyo 184-0015, Japan

** Tokyo Gakugei University 4-1-1 Nukii Kitamachi, Koganei City, Tokyo 184-0015, Japan

1. はじめに

文部科学省(2018)によると、部活動の位置付けは、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と記載されている。教員も部活動の機能として「生徒の就職や進学に役に立つ」、「生徒の問題行動の抑止に効果がある」および「教員としての資質が向上する」などの効果を感じているという調査報告がある(野村、2018)。一方で、「体罰やハラスメントといった部活顧問・指導者の在り方や指導内容の問題、『ブラック部活』という言葉で表現されるような、部活を担う顧問教員の業務負担、過度な拘束の問題など、メディアを通じて連日のように発信され、話題となっている」といった問題が取り上げられている(青柳、2019)。この問題を解決する施策として、2017年にスポーツ庁により部活動指導員が制度化された(スポーツ庁、2017)。

さらにスポーツ庁は「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を提示し、「学期中は週当たり2日以上は休養日を設ける」と記している(スポーツ庁、2018)。しかし、神奈川県教育委員会がまとめた「中学校・高等学校生徒のスポーツ活動に関する調査報告書」(神奈川県教育委員会、2014)では、部活動の適切な活動日数について「6日」と回答した割合が教員は32.8%に対して、外部指導員は55.1%であった。昨今の部活動は、過熱化していると言われており(野村ら、2018)、外部指導員の導入はそこに拍車をかける可能性もある。

外部指導員の導入にあたり、部活動の顧問は外部指導員に求める資質として、「学校の顧問と協力して指導できる」が最上位で33.2%であり、27.9%であった「専門的な技術指導ができる」を上回っていた(神奈川県教育委員会、2014)。また、文部科学省の「運動部活動等に関する実態調査」において「運動部の主担当顧問教員が、部活動に関する悩みについて」という設問に対して、8.6~23.5%の顧問が「保護者の理解不足・過熱」を挙げている(文部科学省、2017)ことから、部活動の運営において保護者との関係も考慮することも必要であろう。

2. 目的

これまでの部活動指導員に求める資質や能力につい

ての調査は選択式のアンケートであった。そこで本研究では、調査として保護者への自由記述アンケート(調査①)と顧問へのインタビュー(調査②)を実施し、その結果に基づいて、教員を志す大学生が部活動の指導の実践より得られた成果から課題を抽出すること(調査③)で、部活動指導員の育成カリキュラムの開発について検討することを目的とした。

3. 方法

3.1. 保護者のニーズ分析(調査①)

3.1.1. 対象

東京都内の高校野球部に所属する男子部員の保護者にアンケート調査を実施した。調査に当たっては調査目的、方法を記載した依頼文書と口頭にて十分説明を行い、回答をもって調査への同意とした。回答が得られたのは父35名と母58名の計93名の保護者で、部員の学年は1年生が56名、2年生が37名であった。

3.1.2. アンケート内容

回答方法は無記名で、「部活動を通じて子どもに期待する姿」と「部活動指導者に望む能力・資質」の2つの項目に対する自由記述とした。

3.1.3. 分析方法

アンケート調査に対して得られた自由記述の回答をテキスト形式にデータ化し、「子どもに期待する姿」と「部活動指導者に望む能力・資質」への記述について計量テキスト分析を行った。解析にはKH Coder Ver.3.Alpa.17i(以下、KH Coder)を用いた。

計量テキスト分析(KH Coder)の手順は二段階とした。まず、第一段階として保護者における「子どもに期待する姿」と「部活動指導者に望む能力・資質」の記述のおおまかな内容をつかむために抽出語リスト、共起ネットワークを作成した。さらに、その記述内容が父親や母親の違いによって、いかに異なっているのか対応分析を行った。次に第二段階として、第一段階や先行研究を参考にしてコーディングルールを作成した。

なおこれらの各段階において、KH CoderのKWIC検索(テキストの検索と閲覧)の機能を利用した。

3.2. 顧問のニーズ分析(調査②)

3.2.1. 対象

東京都内の中学校と高校野球部の顧問教員(以下、顧問)にはインタビューを実施した。インタビュー対象は17名で、20代が2名、30代が9名、40代が3名そして50代が3名であった。調査に当たっては調

査目的と方法を十分に説明し、回答をもって調査への同意とした。

3.2.2. インタビュー内容

顧問に対しては個別に「部活動において子どもにどのような成長を望み、どのように接しているか」と「外部指導員にどのような能力や資質を望むか」の2点について半構造化インタビューを実施した。

3.2.3. 分析方法

同意を得た上でインタビュー内容を記録媒体に録音し、全ての内容を書き起こした。データ分析は、川喜田(1967)によるKJ法に依拠して実施した。まず記述データを通読した上で、「部活動において子どもにどのような成長を望み、どのように接しているか」と「外部指導員にどのような能力や資質を望むか」の2点に依拠して記述単位を抽出してカード化した。次に単位化したカードに記載された内容の類似性に注目してグループ化した。それぞれのグループの内容を表す文を作成して名称をつけた。

3.3. 指導実践(調査③)

3.3.1. 調査の対象と内容

東京都内の高校野球部2校に対して、硬式野球部に所属する教育学部の大学生2名(年齢:21.0±1.0歳、野球歴:13.5±1.5年)がそれぞれ指導に当たった(以下、指導員)。高校野球部の戦績および部員部員数の内訳は、次に示す通りであった。

- ①K 高校野球部 3回戦敗退 32名
- ②M 高校野球部 2回戦敗退 18名

3.3.2. 調査内容

指導員が高校野球の活動時間に部員に対して指導を行った。指導内容は顧問と相談の上で決定した。指導に当たって、調査①と②より得られた結果から作成した留意事項を念頭に行うように指示した。

指導員は、各学校の平日の活動日に合わせて部活動に参加した。1週間毎に合計2回、指導員に対して「指導において心がけたこと」についてインタビューを行った。

3.3.3. 分析方法

同意を得た上でインタビュー内容を記録媒体に録音し、全ての内容を書き起こした。データ分析は、川喜田(1967)によるKJ法に依拠して実施した。まず記述データを通読した上で、中間インタビューでは「指導において心がけたこと」と最終インタビューでは「中間のフィードバック後に修正したポイント」に依拠して記述単位を抽出してカード化した。次に単位化したカードに記載された内容の類似性に注目してグループ

化した。それぞれのグループの内容を表す文を作成して名称をつけた。なお、これらの分析内容について、指導員ごとに中間インタビューと最終インタビューを比較した。

4. 結果及び考察

4.1. 保護者のニーズ分析

「子どもに期待する姿」について頻出した60語の抽出後リスト表1に示した。「仲間」、「大切」、「行動」、「目標」などのニーズを表すと考えられる用語が上位にあった。

共起ネットワークを図1に示した。共起ネットワークにおいて、「部」、「部活」、「活動」は除いた。

表1 「子どもに期待する姿」抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	88	出る	20	精神	13
人	66	子ども	18	大人	13
自分	61	挨拶	17	理解	13
活動	54	指導	17	学校	12
仲間	50	取り組む	17	言う	12
部	45	部活	17	今	12
持つ	38	学ぶ	16	自身	12
考える	37	協力	16	相手	12
身	35	心	16	必要	12
大切	34	人間	16	スポーツ	11
行動	33	良い	16	技術	11
目標	32	関係	15	最後	11
野球	32	強い	15	多い	11
力	30	向かう	15	達成	11
付ける	29	姿	15	様々	11
チーム	28	協調	14	向上	10
社会	28	経験	14	高校	10
努力	27	生活	14	思いやる	10
気持ち	25	能力	14	将来	10
成長	22	礼儀	14	大事	10
コミュニケーション	21	感謝	13	知る	10

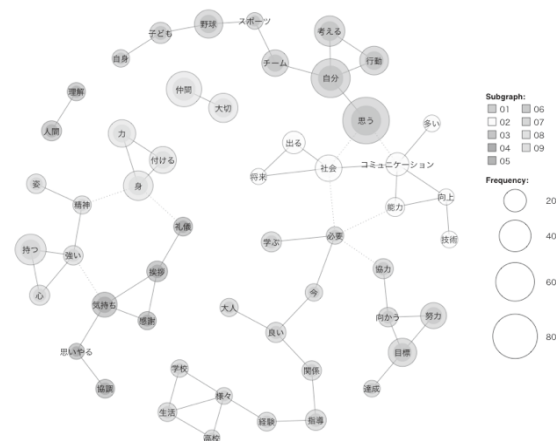


図1 「子どもに期待する姿」共起ネットワーク

子どもに期待する姿のコードと用いられた単語の出現率を表2に示した。なお、コーディングルールは、

文部科学省（2017）による「運動部活動等に関する実態調査」において、「部活動に最も期待することについて」という設問に対する回答の上位を占めた「チームワーク」、「社会性を身につける」および「技術・体力の向上」とした。抽出語の出現率は、それぞれ27.7%、21.5%、12.5%であった。

文部科学省（2017）は、部活動に最も期待することについて、「社会性(挨拶・礼儀等)を身につける」と「体力・技術の向上」がほぼ同等であったことに対し、本研究では「技術・体力の向上」よりも「社会性」の方が高い値であった。藤本（2008）によれば、自由記述回答形式の質問は、選択型に比べ回答者の本音を引き出すことが可能である。すなわち、「技術・体力の向上」の優先度は、選択肢になければあえて選ぶことはないというのが保護者の本音なのであろう。

表2 「子どもに期待する姿」コードと出現率

コード（出現率）	分類に用いられた単語
チームワーク (27.7%)	仲間、協力、協調、目標、行動
社会性を身につける (21.5%)	礼儀、挨拶、規律、マナー、社会、責任、コミュニケーション、感謝
体力・技術の向上 (12.5%)	野球、技術、体力、向上

「部活動指導者に望む能力・資質」について頻出した60語の抽出後リスト表3に示した。「子ども」、「生徒」、「選手」などの指導対象を示す語が多かった。

共起ネットワークを図2に示した。共起ネットワークにおいては、「部」「部活」「活動」は除いた。

表3 「部活動指導者に望む能力・資質」抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
指導	128	能力	17	力	11
思う	76	コミュニケーション	16	スポーツ	10
子ども	69	見る	16	学校	10
活動	54	行う	16	合わせる	10
考える	38	関係	15	情熱	10
生徒	35	練習	15	成長	10
部	35	人間	14	相手	10
選手	28	厳しい	13	部活	10
技術	23	資質	13	レベル	9
人	23	時間	13	結果	9
必要	23	伸ばす	13	社会	9
一人ひとり	19	求める	12	知識	9
持つ	19	個性	12	愛情	8
信頼	19	行動	12	意見	8
理解	19	自分	12	外部	8
良い	19	大切	12	楽しい	8
チーム	18	経験	11	環境	8
教える	18	言う	11	気持ち	8
野球	18	重要	11	特に	8
時代	17	伝える	11	話	8

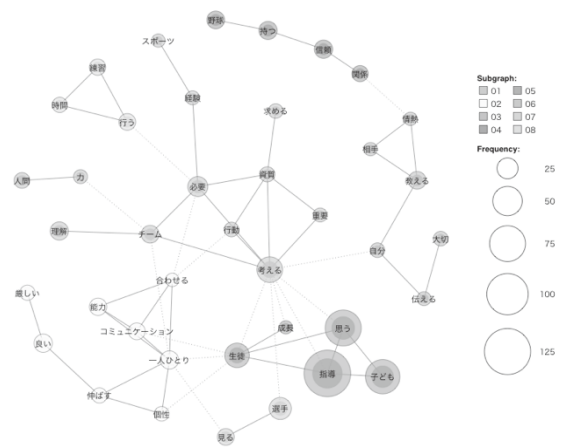


図2 「部活動指導者に望む能力・資質」共起ネットワーク

部活動指導者に望む能力・資質のコードと用いられた単語の出現率を表4に示した。なお、コーディングルールについては、平成17年10月の中央教育審議会答申の「新しい時代の義務教育を創造する」において優れた教師の条件について打ち出された「教職に対する強い情熱」「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」を参考に、「指導への情熱」「専門技術」「人間力」の3つとした。抽出語の出現率は、それぞれ21.1%、15.7%、21.9%であった。

部活動において「生徒だけでなく教員も含めて過熱していることを論じている」（野村、2018）とも言われている一方で、この結果から保護者から指導者への専門技術の要求への優先順位はやや低い傾向にあることが示された。

表4 「部活動指導者に望む能力・資質」コードと出現率

コード（出現率）	分類に用いられた単語
指導への情熱 (21.1%)	情熱、厳しい、能力、時代、チーム、教える、伝える
専門技術 (15.7%)	野球、スポーツ、技術、練習
人間力 (21.9%)	コミュニケーション、個性、一人ひとり、信頼、関係、経験、人間、合わせる

4.2. 顧問のニーズ分析

顧問へのインタビューの内容から、「部活動において子どもにどのような成長を望んで接しているか」と「外部指導員にどのような能力や資質を望むか」についてカード化された単語をグループ化した。その項目をさらなる類似性からカテゴリー分けをした。

「部活動において子どもにどのような成長を望んで接しているか」について集約されたカテゴリーと、そこに含まれるコードをまとめたものを表5に示した。

野村 (2018) によれば、教員は部活動の機能として「生徒の就職や進学に役に立つ」などの専門競技以外に波及する効果を感じている。本調査においても部活動を通じて、専門競技の能力以外の成長を望んでいることが示された。

表5 子供に期待する成長と接し方

カテゴリー	コード
社会に必要とされる人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ・他者への貢献 ・将来的な社会貢献 ・上下関係の構築 ・リーダーシップの獲得
個人能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション ・礼儀や挨拶の習得 ・専門競技の能力
体験の場の提供	<ul style="list-style-type: none"> ・失敗をしても良い場 ・仲間との協働の場 ・自ら課題の解決に向かう場

「外部指導員にどのような能力や資質を望むか」について集約されたカテゴリーと、そこに含まれるコードをまとめたものを表6に示した。神奈川県教育委員会の調査によれば(2014)、顧問が外部指導員に求める資質として「学校の顧問と協力して指導できる」と「専門的な技術指導ができる」が上位を占めた。これは本調査においてカテゴリー化された「教育者としての協働」と「指導能力」の2点に類似していると考えられる。

表6 外部指導員に望む能力や資質

カテゴリー	コード
教育者としての協働	<ul style="list-style-type: none"> ・学校部活動への理解 ・体罰問題への理解 ・技術指導に偏らない ・自分勝手に進めない
子どもの成長の手助け	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもへの愛情 ・子どもへの多角的な介入 ・子どもとの信頼関係の構築
指導能力	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション ・専門技術を有している ・指導に対する向上心がある

4.3.1. 指導実践に向けた指導上の留意事項の作成

保護者へのアンケートから得られたコードと顧問へのインタビューから得られたカテゴリーより、指導員が指導に当たる上での注意点を以下の5点とした。

- ① 競技と学校教育のバランスを考えること
- ② 円滑なコミュニケーションをとること

- ③ 選手の日線に立って指導すること
- ④ 個々に合わせて指導をすること
- ⑤ 自らの専門能力を発揮すること

4.3.2. 指導実践による気づき

中間と最終のインタビューの内容からカード化された単語をグループ化した。その項目をさらなる類似性から「指導の働きかけ」、「指導の促進因子」、「指導の阻害因子」、「修正した点」および「修正の成果」にカテゴリー分けをした。集約されたカテゴリーと、そこに含まれる項目をまとめたものをそれぞれ表7と表8に示した。

表7 指導員Aのインタビュー結果

カテゴリー	コード
指導の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人としての関係を構築 ・野球以外の話でアイスブレイク
指導の促進因子	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えられる知識がある分野 ・話を受け入れる選手の存在 ・部員との関係を築けたこと
指導の阻害因子	<ul style="list-style-type: none"> ・話を受け入れない部員 ・伝えられる知識がない分野 ・部員との関係が近づきすぎたこと
修正した点	<ul style="list-style-type: none"> ・厳しさを持って指導に当たる ・相手に合わせた立ち位置の調整
修正の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・部員からの働きかけの促進

表8 指導員Bのインタビュー結果

カテゴリー	コード
指導の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・先生と生徒の関係を維持 ・野球以外の話でアイスブレイク
指導の促進因子	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えられる知識がある分野 ・話を受け入れる選手の存在
指導の阻害因子	<ul style="list-style-type: none"> ・顧問の考えへの理解不足 ・部員のニーズへの理解不足 ・話を受け入れない部員の存在 ・伝えられる知識がない分野
修正した点	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの促進 ・部員へのヒアリング ・顧問へのヒアリング
修正の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・部員のニーズの理解 ・アドバイス内容の洗練

指導において「伝えられる知識がない分野」は両指導員に共通しており、これが部員への積極的な働きかけを阻害していた。山田(2014)によれば、教員志望学生の保健学習に対する自信のなさの主要な原因は経験や知識の不足を挙げていた。これは本研究における

阻害因子と一致すると考えられ、指導に当たって専門知識を学習することも必要であろう。

指導員 A においては「部員との関係を築けたこと」が促進因子であった一方で、「部員との関係が近づきすぎたこと」が阻害因子でもあった。都丸 (2005) によれば、中学校教師の対生徒関係についての悩みの中にある「生徒からの非受容感」の理由として、年齢が近いことで生徒との距離が自然と近くなり、適切な距離感がつかみにくいことが挙げられると述べている。指導員 A においても、生徒との適切な距離の構築に悩み、促進と阻害の両方に部員との関係が挙げられたものと考えられる。

指導員 B においては、「部員のニーズへの理解不足」が阻害因子にあり、修正に当たって「部員への質問を増やしたこと」を挙げている。部員のニーズを理解した結果、アドバイス内容が洗練されたという成果も挙げている。「コーチングとは、相手から答えを引き出すことを目的としたコミュニケーション手法であり、答えを教えるタイプのティーチングとは異なる」(浜田、2013) とあり、指導員 B の働きかけがコーチングへ近づいたものと考えられる。部員の取り組みの促進において、コーチングの技術も必要であろう。

本研究の限界として、「①調査対象が野球部のみであったこと」、「②部活動に積極的な顧問が対象であったこと」、そして「③指導員の人数が2名であったこと」などが挙げられる。今後は幅広い対象へのニーズ調査を行うことや、指導実践にあたる指導員を増やすことが課題であろう。また、今回提示した専門知識や技術などを得た上での指導に当たることで、より良い指導実践を展開することができるかも検討したい。

5. まとめ

本研究は、調査①において保護者、調査②において顧問のニーズを分析した。その結果から作成した指導実践に向けた指導上の留意事項に基づき、指導員による指導実践からその成果と課題を抽出することで、部活動指導員の育成カリキュラムの開発について検討することを目的とした。

調査①および②の結果より、指導上の留意事項は、「①競技と学校教育のバランスを考えること」、「②円滑なコミュニケーションをとること」、「③選手の目線に立って指導すること」、「④個々に合わせて指導をすること」そして「⑤自らの専門能力を発揮すること」の5点にまとめることができた。この結果を踏まえ、調査③の指導実践後のインタビューから得られた成果

と課題の分析から、外部指導員の育成にあたっては、「専門知識」、「部員との信頼関係」および「コーチングの技術」を高めるようなカリキュラムとすることの有効性が示唆された。

【参考文献】

- 青柳健隆 (2019) 部活動の論点「これから」を考えるためのヒント. 旬報社
- 藤本正己、古本美奈代 (2008) 徳島市高齢者保健福祉計画に関わる意識調査における自由記述回答の分析. 医療情報学 28(1):21-30
- 神奈川県教育委員会 (2014) 中学校・高等学校生徒のスポーツ活動に関する調査報告書
- 浜田百合、庄司裕子 (2013) コーチングの心理的効果に関する研究. 日本感性工学会論文誌 12 (2) : 311-317
- 川喜田二郎 (1967) 発想法—創造性開発のために. 中央公論新社
- 文部科学省 (2017) 平成 29 年度「運動部活動等に関する実態調査」集計状況. p18
- 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 総則編. p172
- 野村駿 (2018) 働き方・部活動における意識の分化 内田良 調査報告：学校の部活動と働き方改革—教師の意識と実態から考える. 岩波書店、pp24-45
- 野村駿、太田知彩、上地香杜、加藤一晃、内田良 (2018) なぜ部活動指導は過熱するのか?—過去の部活動経験との関連から—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 65 巻 2 号 : 109-121
- スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. p5
- 都丸けい子、庄司一子 (2005) 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究. 教育心理学研究 53 : 467-478
- 山田浩平、藤原朋香、山崎里紗 (2015) 養護教諭志望者と保健体育科教諭志望者の保健学習に対する意識の比較. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要. 5 : 69-76
- この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。